

短歌の「朗読」、音声表現をめぐる（4）戦時下の「短歌朗読」2

前記（b）、朗読用『大東亜戦争愛国詩歌集』の巻末に置かれた「大東亜戦争短歌抄」における収録歌人二三人の中、歌数が一番多いのは斎藤瀏六首、次いで四首が斎藤茂吉、北原白秋、吉植庄亮、川田順、三首が逗子八郎、斎藤史であった。当時の「歌人勢力図」からいっても、瀏、八郎（井上司郎）、史の登場には突出しているという感を免れないでいる。

- ・神のゆるしたまはぬ敵を時もおかず打ちて止まむのおおみことのり（斎藤茂吉）
- ・ルーズヴェルトチャーチルのことにあらず世界の敵性を一挙に屠れ（土岐善麿）
- ・忍ぶべき限りしのべり今にして一億の皇民 起たざらめやも（斎藤史）

こうした朗読用の詩歌集の現実的な役割について、坪井秀人は、その主題から戦意の昂揚、戦捷の祝賀、敵への侮蔑、英霊への讃歌などのため、一つは学習教材として、一つは出征兵士や帰還兵士（英霊）たちの送迎歌のテキストとして使用された（前掲書一九四～一九五頁、二一五頁）。

一方で、『地理の書他八編』の巻頭「詩の朗読について」において高村光太郎は、日本語は「諸外国語とは違って「上品で、こまやかでな表現の陰影があり、心のすみずみまで響く弾力性のある言葉」であり、「詩の朗読は、この国語の真の美を愛する心に根ざすのである。（中略）国語の美と力とに信頼しそれをどこまでも純粋に伸ばし、またそのなかから未発見の魅力を発見し、われわれ各自が国語を語ることに無二のよろこびと、気持ちよさを強く自覚するところまで進まねばならない」と記す。巻末「詩歌の朗読運動について」の岸田国士は、一片の詩の朗読が、「名士の愛国的訓話」、「高官の弔辞」よりも荘厳で、感動的な印象を与え得る、と記す。続けて、詩歌朗読運動は詩歌を広める運動であると同時に詩歌を生み出し、「詩歌の正しい肉声化を通じて、日本語を暢びやかにし、豊かにし、純粋にすることに役立ち得る」と述べる。両者は、共通して日本語を「純粋」にすることを強調している点に注目したい。

今回、『ポトナム』会員としても興味深い書物に出会った。当時の朗読ブームの中で刊行されたアンソロジー、小島清編『中等学生のための朗詠歌集』（湯山弘文堂 一九四二年一〇月）である。上世・中世・近世・現代篇の四部構成で、万葉集の舒明天皇の国見の長歌から始まる。現代篇は「諸家作品」「大東亜戦争五拾首」に分かれ、前者は天田愚庵で始まり、茂吉の次の歌で終わる、二三人七〇首であった。

- ・美しき沙羅の木のはな朝さきてその夕には散りにけるかも（天田愚庵）
- ・むかうより瀬のしらなみの激ちくる天竜川におりたちにけり（斎藤茂吉）

後者は、「戦地篇」三五人三五首と「銃後篇」一五人一五首で構成されている。「戦地篇」には故・渡辺直己、衛生兵・酒井俊治、ノモンハン・松山国義、山西・小泉菱三、中支・酒井充実、「銃後篇」には茂吉、白秋、順、空穂、善麿と並んで颯田島一二郎、福田栄一、森岡貞香、板垣喜久子の名があった。「ポトナム」同人小島清の思い入れが過ぎる面も垣間見えるのだが、私が着目したのは「小序」であった。「日本精神の昂揚といふことは、いつの時代にあつても盛んであつたが」と始まり、その中段で、純日本的なものを見出すための学問の方法とは別に、日本の歴史を振り返れば「外国との交渉がすでに古い歴史をもつてゐる」という事実の中から純日本的なものだけを抜き取るのは容易でなく、抜き取ったとしても、それがその時代の日本精神のすべてではない、と説いている部分である。先の「国語を純粋」にすることとは対照的な言ではないか。
(『ポトナム』2008年6月号所収)